

『江戸の高級ブランド茶』

将軍家の「御用茶」

足久保のお茶が脚光を浴びるようになったのは江戸時代のこと。

晩年、駿府に隠居した徳川家康公は茶の湯を好み、頻繁に茶会を催しました。夏でも涼しい井川の大日峰に、お茶を詰めた茶壺を保管する御茶蔵を建て、井川を支配していた海野氏に命じて管理させたと伝えられます。現在、井川にはこの御茶

藏が再現され、毎年10月には久能山東照宮へお茶を運ぶ「お茶壺道中」が行われます。

延宝9年(1681)、徳川綱吉の時代に、足久保から煎茶を江戸城に納めたことが記録されています。江戸城への「御用茶」献上は、その後約六十年にわたり、継続して行われました。御用茶を納める足久保村は、諸役御免、人足干

人分の扶持米の支給などの特権が幕府から与えられ、非常に裕福でした。

御用茶は、当時足久保に3カ所あった御茶小屋で製茶され、井川の御茶蔵で保管の後江戸城に届けられました。栗島地区の御茶小屋のあつた所には、今も「茶小屋」の屋号で呼ばれる家があります。

徳川家康公(久能山東照宮提供)▶

茶商・竹茗の刻んだ碑文

足久保茶にとって重要な史跡に、「狐石」があります。大きな石の表面に、天明8年(1788)に駿府の茶商・山形屋庄八(初代竹茗)によって刻まれたと伝わる碑文があり、芭蕉の「駿河路や」の句とともに、自らの製茶技術復活の業績が記されています。

古考から話を聞くなどして、十年に及ぶ苦心の末、復活に成功しました。こうして再び足久保で高級煎茶の生産がはじまつたことを伝えています。

御用茶の献上停止から時を経て、足久保で

はかつての青茶(高級煎茶)の製法が失われていきました。それを復活させようと、竹茗は鮫沢(舟沢)の辺りに小屋を構えて茶を栽培し、その傍らには聖一国師の碑が建ち、毎年供養祭が行われます。

「狐石」の名の由来は、ここに狐が棲んでいたことから。また、容易に変化することからお茶の葉を「狐つ葉」と呼ぶこととも関係があるのかもしれません。

駿河路やはなたちばなも茶のにほひ 松尾芭蕉

③

狐石

元禄7年(1694)5月、松尾芭蕉が詠んだ句です。駿河路では香り高い橋です。茶の香りにはかなわないと言っています。駿河路といえば茶が思い浮かぶ。それほど茶の産地として広く知られていたことがうかがわれています。